

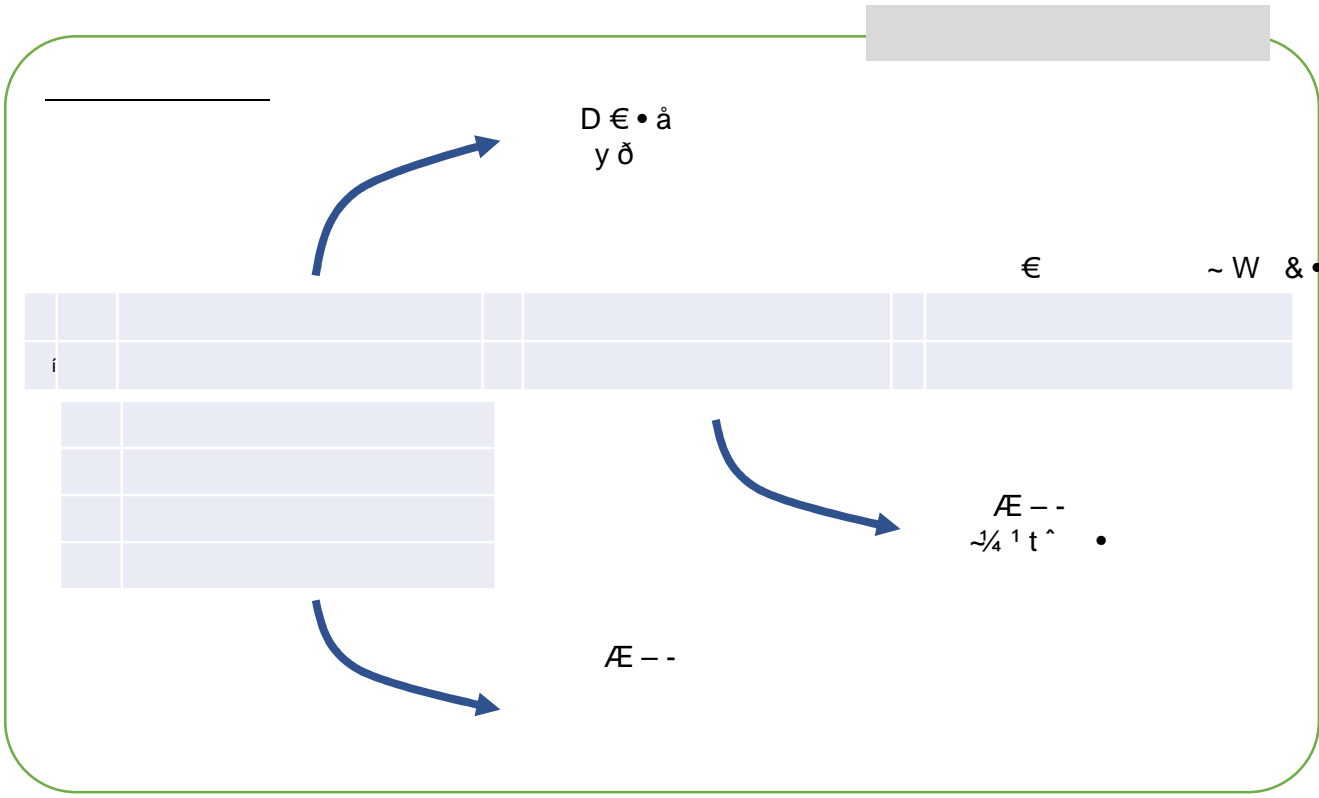
「能の物語」シリーズ

『冬の能 雪の或る夜』

第十六回臥牛サロンより

“ “

“ “



í ð ô ô	
	î î î î
	î î
	î ð
	î ð
	î î î î
î î î ð ð	

A16 『冬の能 雪の或る夜』

- A16C1 salon talk 1 (対談による)
- A16C2 舞の実演：『春日龍神』
- A16C3 salon talk 2 (対談による)
- A16C4 salon talk 3 (鉢木)
- A16C5 謡の実演：『鉢木 薪の段』-独吟
- A16C6 salon talk 4
- A16C7 salon talk 5 (対談による)
- A16C8 舞の実演：『葛城クセ』
- A16C9 舞の実演：『葛城キリ』
- A16C10 salon talk 6 (対談による)
- A16C11 舞の実演：『車僧』
- A16C12 salon talk 7
- A16C13 舞の実演：『高砂』
- A16C14 ご挨拶

演目 『春日龍神』

行番	役	詞章	現代語訳	トークのヒント
1	シテ	八大龍王ハ	八大龍王は	冠を傾ける、つまり頭を下げている。 （②【八大龍王】）
2		八つの冠を傾け	八つの冠を傾け	
3	地	所ハ春日野の月乃三笠の雲に上り	ある龍王は春日野の三笠山の雲に上り	
4		地に下りて飛ぶ火の野守も出でて見よや	或いは地に下る。「誰も彼もよく見るが良い。」	（③【和歌の引用】）
5		摩耶の誕生鷲峯の説法	釈迦の誕生、靈鷲山での説法	
6		雙林乃入滅悉く終りてこれまでなりや	沙羅双樹下の入滅の様など悉く示した。	
7		明恵上人さて入唐ハ	「これでお別れだが、明恵上人よ。 唐へ入ることはどうする。」	
8		とまるべし	「思い留まります。」	
9		渡天ハ如何に	「天竺へ渡ることはどうする。」	
10		渡るまじ	「渡りませぬ。」	
11		偕佛蹟ハ	「では釈尊の古跡は...」	
12		尋ぬまじや	「尋ねません。」	
13		尋ねても尋ねても此上あらしの雲にのりて	「いくら尋ねてもこの上はないのだ。」そう言	入唐渡天しなくても、日本にも同じ位徳の高いところがある事を意味している。
14		竜女ハ南方に飛び去り行けば	龍女は南に飛び去り	（④【南方無垢世界】）
15		龍神ハ猿澤乃池の青波	龍神は猿沢の池の波を蹴立てて、	
16		蹴立てけたててその丈千尋乃大蛇となつて	長さ千丈の大蛇となり	
17		天に群がり地に蟠りて池水をかへして	天地一面に広がり地水に波を立てて	
18		失せにけり	消え失せた。	

① 【春日龍神の物語】

鎌倉時代の華嚴宗の僧、明恵上人（ワキ）は
 入唐渡天（唐に入り、天竺へ渡る事）し
 仏跡訪問を思い立ちます。その暇乞い（別れを
 告げる事）の為に春日明神へ参詣すると
 春日宮守の翁（前シテ）が現れます。
 そして春日明神がいかに明恵上人を
 特別に大切に思っているかを告げ、
 春日山は釈迦が説法したという靈鷲山と
 同じ位徳の高い場所だと言って
 渡航を制止します。春日宮守の翁は
 思い留まるなら釈迦の一代記を見せると言い
 実は自分は時風秀行だと言って姿を消します。

明恵上人が神託を喜んでいと
八大龍王を始めとして
百千眷属を引き連れた諸仏が現れ、
釈迦が靈鷲山で説法した有様を見せます。
明恵上人は入唐渡天を思い留まり、
龍神諸仏はそれぞれ帰りに去ったのでした。
春日大社は平城京遷都にあたり、
都の守護の為、鹿島神宮（茨城県）から
タケミカズチノミコトを三笠山に勧請したのが
始まりとされます。
その時に供奉したのが時風と秀行。
能『春日龍神』の前シテはこの二人を一人として
取り扱っています。

② 【八大龍王】

八大龍王とは仏法を守護する龍族の八王。
難陀龍王（なんだりゅうおう）
跋難陀龍王（ばつなんだりゅうおう）
娑伽羅龍王（しゃからりゅうおう）
和修吉龍王（わしゆきりゅうおう）
徳叉迦龍王（とくしゃかりゅうおう）
阿那婆達多龍王（あなばだつたりゅうおう）
摩那斯龍王（まなしりゅうおう）
優鉢羅龍王（うはつらりゅうおう）
釈迦が靈鷲山で説法した時
その会座に八大龍王が列座したという。

③ 【和歌の引用】

「春日野の 飛ぶ火の野守 出でて見よ
今いくかありて 若菜摘みてん」
（春日にある飛火野の番人よ、
外に出て春の様子を見てみなさい。
いったいあと何日すれば
若菜を摘めるようになるのかと。）
春日野には軍事的な合図の狼煙を
あげるための施設、烽（とぶひ）が置かれており

そのあたりを飛火野といました。

④ 【南方無垢世界】

法華經によると龍女が宝珠を佛に奉って

南方無垢世界に生れたとされています。

なので龍女は南方に帰ります。

⑤ 【冬の能】

能『春日龍神』は春の季節に分類されます。

さて、引用された和歌「春日野の」

この下の句の「若菜摘みてん」、若菜とは

春の七草のこと。1月7日に七草粥を食べる

習慣は現代も残っています。年初めに

「若菜摘み」という風習がありましたので、

この和歌は正月を心待ちにしている様子です。

現代の感覚だと正月は「冬」になると思います。

引用された和歌から関連させて

「冬の能」として選曲しました。

明恵上人を引き留めるべく

神々が一同に会して本国のあらたかさを説く。

能『春日龍神』はたいへんおめでたい曲です。

演目 『鉢木 薪の段』-独吟

行番	役	詞章	現代語訳	トークのヒント
1		捨人のための鉢の木	お僧の為に盆栽を	鉢木とは盆栽の事。
2		切るとてもよしや惜しからじと	切る事は何も惜しくはありません。	(②【シテの人物像】)
3		雪打ち拂ひて見れば面白やいかにせん	こうして盆栽に積もる雪を拂って見ると... なかなか面白いものだ。さてどれから切ろうか。	
4		先づ冬木より咲き初むる	まずは、冬枯れの中、花の中で最初に咲く梅	
5		窓の梅の北面ハ	北側の窓の梅は	
6		雪封じて寒きにも	雪に閉じ込められ寒さで咲き遅れるというが	
7		異木よりまづさきだてば	それでも他の木よりは先に咲く	
8		梅を切りやそむべき	まずは先立つものとして最初に切ろう。	
9		見じといふ人こそ憂けれ山里の	山里の梅は卑しいので見ない、という人は 無風流だと思った。	
10		折りかけ垣の梅をだに	梅の枝で作った折懸垣の梅でさへ	折懸垣：木や竹等を折り曲げて作った垣
11		情なしと惜しみに	無情な事をするを惜しんだ	
12		今更薪になすべしとかねて思ひきや	まさか自分がその梅を薪にするとは思 いもよらなかった。	
13		桜を見れば春毎に	桜を見ると、春が来るたび、	
14		花すこし遅ければ	少しでも花が咲くのが遅れると、	
15		この木や侘ぶると心を盡くしそだてしに	この木に何か障りがあるのではないかと 心配して、丹精込めて育ててきたが	
16		今ハ我のみ悴びてすむ	今は落ちぶれてしまって、	
17		家桜切りくべてひざくらになすぞかなしき	この桜を切って火にしてしまうとは、 本当に悲しい事だ。	
18		さて松ハさしもげに	それから松。	
19		枝をため葉をすかして	曲がった枝を真直ぐにしたり、葉をすかしたり	枝をためるとは曲がった枝を真直ぐにする事。葉をすかすとは剪定する事。
20		かかりあれと	風情があるようにと心を配って	
21		植ゑおきし	植え置いていたが	
22		そのかひ今ハあらし吹く	今はその甲斐もなくなってしまった	
23		松ハもとより常盤にて	松は煙に縁があり	松は脂があり燃えやすい材木。 (④【かざし文句】)
24		薪となるは梅桜切りくべて今ぞ御垣守	梅桜と共に薪にするのも当然でしょう	
25		衛士の焚く火ハおためなり	さあ、この火はあなたの為に焚くのです。	
26		よく寄りてあたり給へや	十分によくおあたり下さい。	

① 【鉢木の物語】

鎌倉時代中期、

上野国佐野（現在の群馬県佐野）に

佐野源左衛門尉常世は妻と暮らしていました。

常世は一族に領地を横領され、すっかり

落ちぶれてしまっていたが、
武士としての心は忘れずに
もし鎌倉に一大事があれば
すぐに駆け参じる心持で日々過ごしていました。
ある大雪の日。あまりの大雪に困っていた
修行僧に宿を貸す事になりました。
夜が更けて行くにつれて寒さは増すので
常世は大事にしていた梅、桜、松の盆栽を切り
僧に暖をとらせるため焚火にしました。
二人は打ち解け夜通し話をします。
そして僧は常世の武士としての覚悟を聞き、
一晩明かし、この家を立ち去ります。
実はこの僧、諸国を旅していた
鎌倉幕府五代執権、北条時頼だったのです。
時頼は鎌倉に帰ると諸国の武士に
鎌倉に参集するようにと命を出します。
常世はみすぼらしいながらも
武士としての心を忘れず馳せ参じます。
時頼は常世の忠節を感じ、横領された領地を
常世に返し与え、更に焚火にした
梅、松、桜の盆栽に名で縁のある、
加賀の梅田、越中の桜井、上野の松井田を
合せて与えます。
常世は悦び勇んで郷里へと帰るのです。

② 【シテの人物像】

シテの佐野常世は僧のために大事にしていた
盆栽を焚火にして暖を取らせました。
鎌倉時代には当然、暖房機器など
ありませんから、客人に暖をとらせることが
おもてなしにつながります。謡を読めば
わかりますが、常世は草木を愛でる風流人。
零落しても手放さなかった大事な盆栽を
焚火にするなんて心が痛むのは当たり前です。
それよりも、目の前にいる僧をもてなす事を
優先させました。心優しい人物です。

この常世の行動は儒教の五徳の考え方、

仁（人を思いやること。）

義（利欲にとらわれず、なすべき事をする事。）

礼（「仁」を具体的な行動に表すこと。）

智（道理をよく知り得る、知識豊富な人。）

信（友情に厚く、誠実であること。）

を表したようです。貧しくても

武士として気高く、真心も忘れない

人として取るべき行動をできる人格者は

なかなかいないと思います。

だからこそ時頼は鎌倉に帰ってからの行動に

でたのでしょうか。

この展開は、人に親切にすれば廻り廻って

自分のためになる。という意味の諺

「情けは人の為ならず」の例の一つでも

あります。

③ 【薪の段】

段というのは舞や節使いが秀逸な部分の事。

薪についての段なので「薪の段」といいます。

舞はありませんが、謡の節使いは難しく

聞き応えがあり、謡の詞章も大変面白いです。

④ 【かざし文句】

謡の文句の中に忌みはばかられるものが

ある時、別の文句にして謡う事。

もとは「松はもとより〈煙〉にて」

でしたが、徳川氏の別称・松平をはばかり

「松はもとより〈常盤〉にて」とかえて

謡うようになりました。

〈松〉は燃やして煙にするのに

適している、と謡って

謀反ととらえられてしまったら大変です。

⑤ 【冬の能】

能『鉢木』は真冬の大雪が降る日のお話。

シテが最初に言う詞、「ああふったる雪かな」

雪深い情景が目には浮かびます。

「薪の段」においても盆栽の上に

雪が積っている描写があります。

実際の能では雪の積もった鉢木の作り物

を舞台上に出します。

能『鉢木』はまさに「雪の能」です。

演目 『葛城クセ』

行番	役	詞章	現代語訳	トークのヒント
1	シテ	かづらきや	『葛城や	((②【クセ】))
2	地	木の間に光る稲妻ハ	木の間に光る稲妻は	
3		山伏の打つ	山伏の打つ	
4		火かとこそ見れ	火かとこそ見れ』という和歌があるが	
5		げにや世の中ハ	本当に、人生というのは	
6		電光朝露石乃火の	稲妻の光や、朝の露、火打石の	電光朝露石の火：人生がはかない事の喩。
7		光の間ぞと思へただ	光の様にはかないものである。	
8		我が身の歎をも取り添えて	自分の歎きを投げ木と	我が身の歎き：歎きと投げ木、言葉を重ねた。
9		思ひ真柴を焚かうよ	思って柴と共に焚いてしまおう。	
10	シテ	捨人の	世捨て人の御事とて、	
11		苔乃衣の色深く		
12	地	法に心ハ墨染の	仏道に心を澄まし、	心の澄む、墨染
13		袖もさながら白妙の雪にや色をそみかくだ乃	山伏のお召しになっている墨染色の衣も、雪のためか白く染まったようで、	そみかくだ：山伏の異名。色を染む。
14		篠懸もさえまさる標を集め柴を焚き	寒さも一入お感じの事と思います。しもとを集め柴を焚いて	冴えまさる霜、しもと
15		寒風を防ぐ葛城の	寒い風を防ぎましょう。	
16		山伏の名にしおふ	山伏の名の通りこの山に臥し、	
17		片敷く袖の枕して	お召しになった着物の袖を枕にして、	
18		身を休め給へや御身を休め給へや	お休みください。	

【葛城の物語】

ある山伏（ワキ）が葛城明神に参詣するため

葛城山に辿り着きました。季節は冬、

雪が止む気配がなく、困っていると

女性（シテ）が現れ、宿を貸してくれます。

女性は焚火で暖を取らせてくれて

手厚いもてなしを受けた山伏は感謝し

夜の勤行（一定の時を定めて行う読経）を行うと

その女性が、実は自分は葛城明神で

自分の為に加持祈禱をして欲しいと頼んで

姿を消します。

山伏が葛城明神のために加持祈禱をしていると

本来の姿の葛城明神（後シテ）が現れ

舞を舞って喜びを表し、夜が明ける前に

葛城の岩戸の内に姿を消します。

② 【クセ】

『葛城や 木の間に光る 稲妻は

山伏の打つ 火かところ見れ』

(葛城山の木の間に光る稲妻は

山伏が火打石を打つ火の光のように見える)

人生のはかなさを表す「電光朝露石の火」

の意味合いを持った和歌から始まります。

人生のはかなさを歎いている女性ですが

大雪に困っていた山伏を助け、もてなします。

このクセの部分は女性の心優しく

暖かな気遣いの場面です。

③ 【冬の能】

能『葛城』は雪深い葛城山でのお話です。

その雪深いなかでの「クセ」のもてなしの場面。

寒い中、人間の暖かさを感じられます。

能では雪の積もった笠を被り、

雪の積もった柴を負い、杖をつきながら

シテは登場します。雪深いなか歩いている

描写がされます。

演目 『葛城キリ』

行番	役	詞章	現代語訳	トークのヒント
1	シテ	高天乃原の磐戸の舞	高天原の天の岩戸の前で神楽を舞った という伝説になぞらえて舞を舞うと、	
2	地	高天の原の磐戸の舞		
3		天の香具山も向ひに見えたり	向こう側に天の香具山も見える。	
4		月白く雪白く	月も白く、雪も白く、	
5		何れも白妙のけしきなれども	全て白い景色だけれども、	
6		名におふ葛城乃	有名な葛城の神は	
7		神の顔がたち面なや面はゆや	見苦しい顔かたち。	
8		恥かしやあさましや	人に見られるのが恥かしい、あさましい。	
9		あさまにもなりぬべし	そう言っているうちに夜も明けてきた。	
10		明けぬ先にと葛城の	明けないうちに帰ろう、と、	
11		明けぬ先にとかつらきの夜の		
12		磐戸にぞ入り給ふ磐戸の内にぞ	葛城の神は岩戸の中に	
13		入り給ふ	お入りになった。	

① 【冬の能】

葛城キリは葛城明神が舞を舞ううちに

朝が来て山伏の前から消える場面。

美しい事を表す雪月花。

美しいのは雪の朝、夜の月、時の花。

葛城キリはその内の一つである

雪の朝の光景が見られます。

演目 『車僧』

行番	役	詞章	現代語訳	トークのヒント
1	シテ	所からここハ浮世の嵯峨なれや	この場所の名は嵯峨、浮世のさが (習い)と、名で縁がある場所。	大天狗対車僧のバトルシーン。
2		雪のふるみち跡深き	雪が深く降り積もっているので、	
3		車の轍は足引の	車は	
4		大雪にハよも行かじ	大雪で動かないと思っていたのに。	
5	地	げに雪山の道なりと	釈迦の修行された雪山でも	雪山成道(せっせんじょうどう) 釈迦は雪山で修行し悟りをひらいた。
6		法の車路平かに	法力の高い車ならやすやすと	
7	シテ	行くかゆかぬか此原の	走ったという。この原の	
8	地	草の小車雨添へて	車も同じだ。	
9	シテ	打てども行かず	太郎坊が打つと進まず	
10	地	とむればすすむ此車の	止めれば進む此車。	
11		法乃力とて	法力の力があるのだ。	
12		嵯峨小倉大井嵐の	嵯峨、小倉、大井川や嵐山の	
13		山河を飛び翔つて	あちこちの山河を飛びかけ、	
14		眩惑すれども騒がばこそ	太郎坊が車僧を惑わそうとしても 車僧は騒ぐ様子もない。	
15		まことに奇特の車僧かなあら貴や恐ろしやと	これは珍しい僧だ。貴くも恐ろしい。	
16		魔障を和らげ大天狗ハ	太郎坊は仏法を妨げる魔の心を和らげて、	
17		合掌してこそ失せにけれ	合掌して立ち去った。	

① 【車僧の物語】

鎌倉時代、牛を繋がない車を、法力の力だけで

自在に動かすので〈車僧〉と呼ばれる

禅僧・深山禅師(ワキ)がいました。

ある冬の日、車に乗り嵯峨野の景色を

眺めていると、愛宕山に住んでいる

天狗の頭領・太郎坊(前シテ)が山伏に姿を変え

現れます。車僧を魔道に誘いこもうと

禅問答を挑みますが車僧は動じません。

太郎坊は自分の住む愛宕山を訪ねよと

言い残して飛び去ります。

季節は真冬、愛宕山は雪が積もっています。

車僧が愛宕山に着くと

本来の大天狗の姿をした太郎坊(後シテ)が

現れ、車僧に法力比べを挑みますが
法力の力で牛がなくても動くだけでなく
車僧は車で空を飛びます。
車を自在にあやつる車僧の法力の力を見て
珍しく、貴く恐ろしい僧だ、敵わない、と
観念して立ち去ります。

② 【冬の能】

雪が降り積もる嵯峨野が舞台です。
法の力、いわば超能力を使う車僧。
仕舞の部分は超能力者対大天狗の
大雪の中でのバトルシーン
といったところでしょうか。

演目 『高砂』

行番	役	詞章	現代語訳	トークのヒント
1	シテ	げに様々の舞姫の	様々な舞姫が	
2		声も澄むなり住の江の	歌う声が澄み渡る、この住之江。	
3		松影も映つるなる	住之江の松の青い影が海の波に映る。	
4		青海波とハこれやらん	名の通り青海波とはこれのことだ。	青海波：盤渉調の舞楽。
5	地	神と君との道すぐに	神の恵みも豊かで、大君の政道正しい	
6		都の春に行くべくハ	この御代の春に、都へ行くのは	
7	シテ	それぞ還城楽の舞	それには還城舞がふさわしい。	還城舞：舞楽の曲名、都に帰る意味。
8	地	さて万歳の	こうしておめでたい	
9	シテ	小忌衣	小忌衣を着て	小忌衣：狩衣風の単上衣。大嘗祭、新嘗祭等で舞人や祭官が着る祭服。
10	地	さすかひなにハ	舞のさす手は	
11		悪魔を拂ひ	悪魔を払い、	
12		をさむる手にハ	引く手には	
13		寿福をいだき	寿福を抱き	
14		千秋楽ハ民を撫で	千秋楽を奏しては民を愛撫し	千秋楽：盤渉調の楽曲。
15		萬歳楽にハ命をのぶ	萬歳楽は舞っては寿命を延ばす。	萬歳楽：舞楽の曲名。
16		相生の松風颯々の聲ぞ楽しむ颯々の聲ぞ楽しむ	神が袖を翻す音も、相生の松へ吹き渡る風音も颯々と声立てて全てが楽しみに浸るのである。	

【高砂】

高砂は住吉明神がシテの大変おめでたい曲。

「千秋楽」から終わりまでの部分は

付祝言として会の最後に謡う事が多いです。

江戸時代、武家の式楽だった能。

能が上演された後、アンコールとして

仕舞が上演されました。「おしまい」の

語源とも言われています。

ご来場の皆さまのご健勝、ご多幸を

祈念しまして「高砂」の仕舞で「おしまい」と

させていただきます。